

人と組織の 新・論・点

CATALYST*

カタリスト

巻田隆史

ハイパーレスキュー隊隊長、新潟県中越地震の崖崩れから2歳児を救出

「愛・技・絆」が命を救う



誰かが我々を助けてくれる その信頼で前へ進む

2004年10月23日、新潟県中越地方で大地震発生。新潟県からの要請を受け、東京消防庁は消防救助機動部隊（ハイパーレスキュー）を派遣。3日後、行方不明母子3名が乗っていた車の一部が崖崩れ現場で発見され、我々ハイパーに再度出動要請がかかった。

車で現場に向かう途中、震度6の余震に遭遇。初めて体感する、真下から突き上げる激しい揺れだった。崖崩れの現場は、数十トン級の岩が崩れ、折り重なる斜面。余震の直後だけに、誰もが「ここに行くのか」と息を呑んだ。

恐怖心はあった。だが助けを求める人がいれば、救助に行くのが我々の任務。隊員も、私が「行け」と言えば危険な場所でも行くだろう。しかし私には、救助と同時に隊員の命を守る責任がある。

再崩落を警戒し、山頂や現場全体を見渡せる場所、上空に当庁のヘリコプターなど、様々な場所に

監視役を配置。崩落したら川に飛び込むため、川下や対岸には他県の消防隊員を待機させた。万一の場合も誰かが我々の命を救ってくれる。万全の監視体制の中、我々は危険な現場に入る覚悟をした。

絶対に助けると誓った 男児救出までの50分

地震から90時間経過。経験上、生存はかなり厳しいと分かっていたが、奇跡を信じ一步一步斜面を登る。埋もれた車に着くと、車のすぐ横に小さな穴を見つけた。穴を覗き「おーい」と呼びかける。その瞬間、自分の耳を疑う。わずかな音が自分の耳を通ったのだ。「聞こえたか？」思わず叫ぶ。隊員に1人ずつ聞かせると呼吸をしているような声が聞こえると言う。

「生きている！絶対に助けるぞ。一握りの砂も車の中に落とすな」。90時間も頑張っている命を我々のミスで奪うことは絶対できない。手で慎重に小さな穴を直径50センチ程に広げると、穴の奥2メートル程の所に小さな指が見えた。

この小さな穴では一番小柄な田端隊員しか入れない。田端を見ると彼も私を見ていた。彼は言った、「穴に入らせてくれ」と。田端は上半身を穴に入れるが手が届かない。田端は「もっと穴の中に入らせてくれ」と言う。私は躊躇した。自分の手を離れたら田端を守りきれない。だがそれが一番早く確実な救助方法だと全員が分かっていた。私は「頼むぞ」とだけ言った。

田端は急な階段を頭から下りるように穴に入っていく。その間、他の隊員は背中を穴入口の岩に押し付けていた。岩が崩れたら、体を張って入口を守るためだった。

田端は子供を抱き上げ、穴入口で待つ隊員に手渡す。そして田端が穴から出てきたとき、涙が流れるのが自分でもわかった。穴の中の声聞いてから、50分後だった。

男児の救出は、皆の連携がうまく取れた成果です。我々の制服左腕のワッペン裏には隊訓である「愛・技・絆」の3文字が記されています。救出に携わった人たちの行動を思い浮かべながら、いい隊訓だと改めて思いましたね。

文/内田美代子(編集部)

PROFILE まきた・たかし

1960年生まれ。78年東京消防庁入庁。80年特別救助技術選抜試験に合格し、研修修了後、芝特別救助隊配属。以来20年以上にわたってレスキュー一筋。2004年よりハイパーレスキュー隊(東京消防庁 消防救助機動部隊)隊長。国際消防救助隊員として台湾大地震にも出動。